Styron の小説における朝鮮戦争

的　場　いづみ

序

近年、アメリカ合衆国の文学において「忘れられた戦争」であった朝鮮戦争の記憶を語る機運が現れ始めている。1999年には元歩兵による回想録 *We Called It War!* を始めとして、戦地からの手紙を主軸とした回想録 *We Were Innocents*、さらに、短い回想と詩を集めた *Retrieving Bones* が立て続けに出版されている。これらの出版物は、ヴェトナム戦争表象における一つのジャンルである「オーラル・ヒストリー」の流れを汲む。

ここでいうオーラル・ヒストリーとは口承・伝承のことではなく、史実の関係者が口頭で語った体験的な歴史証言を記述したものを基本的には指す。自分の共同体の過去を語るという点は自伝と共通するが、自伝が概して社会的に影響力のある著名人の回顧録であるのに対して、オーラル・ヒストリーの語り手は社会的には無名の庶民であることを特徴とし、この特徴は民衆史への関心の高まりと密接な関係がある。米国では70年代にジャーナリズムの世界で読み物として発表されていたオーラル・ヒストリーが、80年代に顕著であったヴェトナム帰還兵の社会的復権の動きに採り入れられて、短期間のうちにヴェトナム戦争のオーラル・ヒストリーというジャンルが確立される。*The Vietnam Reader* (1998) のなかで編著者 Stewart O'Nan は、80年代に出版された五編のオーラル・ヒストリーを一つの章に収め、その章を「オーラル・ヒストリー・ブーム」と名付け、80年代にお

けるヴェトナム戦争表象の主要な特徴として位置付ける[1]。

オーラル・ヒストリーによって光を当てられたのは主として兵士の被害者としての側面であった。自由主義を守るという名目のもとでアジアの小国を破壊し、非戦闘員にすら残虐行為を加える、という加害者としての兵士のイメージから、自らの生命を賭けながらも、関わったのが不名誉な戦争であったために帰還後社会から冷遇され、戦中のみならず戦後も精神的な傷を負い続ける、被害者としての兵士のイメージが定着する。

80年代には帰還兵の神経障害の研究を通して、PTSD (post-traumatic stress disorder　心的外傷後ストレス障害) という概念が提示され、[2] さらにこの概念が、帰還兵の精神障害のみならず、犯罪被害、ドメスティック・ヴァイオレンスや子どもへの身体的虐待、性的虐待、四肢切断などの外科手術、自然や人工的な災害、家族や親しい人の死の経験、死体の目撃等が原因であるトラウマにも適応され、その結果、トラウマについての理解が精神医学や臨床心理学の分野を越えて一般に広まった。それに伴って、80年代以降、帰還兵のかかえるトラウマに対する理解も深まり、こうした動きも兵士の被害者としてのイメージを補強することになる。

負け戦ではなくとも、勝利感なき戦いであり、今では "war" とすら呼ばれない朝鮮戦争から帰還した元兵士たちが、80年代におけるヴェトナム帰還兵の社会的復権に力を得て、自分たちの記憶を語る術を「オーラル・ヒストリー」に見出したとしても不思議はないし、朝鮮戦争のオーラル・ヒストリーは、当面、ヴェトナム戦争のオーラル・ヒストリーの影響を強く受けるであろう。しかし、ヴェトナム戦争表象と朝鮮戦争表象を比較してみた場合、前者の夥しい数に比べ、後者はほとんど空白のまま取り残されていると言っても過言ではない。

朝鮮戦争表象として最も有名なのは、おそらく、テレビ・シリーズとして放映され、後に映画化された*M*A*S*H* (映画化は1970) であろう。だが、小説においては、大衆小説の分野で James A. Michener の *The Bridges at Toko-ri* (1953)、*Sayonara* (1954)、さらに軍隊付き牧師として朝鮮戦

争に従軍したユダヤ系作家 Chaim Potok の *I Am the Clay* (1992) といった若干の例を除いては、朝鮮戦争はほとんど取り上げられていない。朝鮮戦争に従軍した Raymond Federman が *Take It or Leave It* (1976) において時代背景の設定を朝鮮戦争の時期としているものの、小説自体は、徴兵され、陸軍で訓練を受けた青年が前線に送られる前に与えられた一ヶ月の特別休暇のうちの五日間の物語であるため、直接朝鮮戦争は描かれない。その青年にとっての戦争は、作者 Federman 同様、あくまでも幼少時に体験した第二次世界大戦、特に家族四人がナチスの強制収容所で殺されたというホロコースト体験である。

このように、米文学において朝鮮戦争が顧みられないなかで、 William Styron (1925－　) が朝鮮戦争時の海兵隊の物語を *The Long March* (1956)、"Marriott, the Marine" (1971) と二度にわたって小説化していることは注目に値する。確かにこの二つの小説も直接に朝鮮戦争を扱ったものではなく、朝鮮戦争時の米国内での海兵隊訓練所での物語であるため、厳密に言えば、これらは朝鮮戦争表象とは言えないかもしれない。しかし、同時期の同じ訓練所を舞台としながらも、ヴェトナム戦争に本格介入する以前の50年代に出版された *The Long March* とヴェトナム戦争末期に発表された "Marriott, the Marine" では、明らかな相違が見られる。朝鮮戦争の帰還兵たちがヴェトナム戦争のオーラル・ヒストリーを経て自分たちの記憶に形を与えることができたように、Styron がヴェトナム戦争を経て自らの語りに及ぼした変化を本論では考察する。

Ⅰ. Styron と戦争との関わり

まず Styron と戦争との関わりを伝記的事実にそって確認しておきたい。彼には実戦の経験はないが、第二次大戦中と朝鮮戦争中に二度、海兵隊での訓練を受けている。最初の訓練は44年から45年、二度目は51年である。[3]

1925年生まれの Styron が最初に徴兵されるのは第二次大戦中44年10月の

ことである。43年から Duke 大学で学んでいた彼は South Carolina 州 Parris Island にある海兵隊訓練所へと向かい、45年2月から数週間は同じ州の Camp Lejeune で訓練を受ける。

Styron の右目は先天性の白内障だったため、その事実を申告すれば除隊できたのだが、同世代の若者とともに第二次大戦に参加したいと願った彼は、視力表を暗記して検査をパスする。

South Carolina での体験は上官によるサディスティックな訓練等もあり概ね陰惨で、中でも Parris Island での訓練中の44年11月に血液検査を受けた彼は誤って梅毒の疑いをかけられ、二週間以上淋病棟に隔離される。その時の非人間的な扱いに憤りを感じた彼は、軍隊や官僚支配に日常的に現れる非人間性に対する嫌悪感を強める。この時の経験は後に戯曲 *In the Clap Shack* (1973) として形象化されることになる。

45年5月からは Washington, D.C. で訓練を受け、7月下旬には海兵隊少尉に任命される。広島に原爆が投下された8月6日には San Francisco で軍隊輸送船への乗船命令を待っていたが、命令が下される前に日本は降伏し、実戦の経験を経ないままに第二次大戦は終結する。

45年10月から一ヶ月程度、Styron は Long Island Sound の Harts Island にある海軍刑務所で働き、監禁する者とされる者との関係を身近に観察することになり、この経験は、第一作 *Lie Down in Darkness* (1951) からすでに "imprisonment" という主題として現れている。

彼は45年12月に海兵隊を除隊するが、再召集の際には自動的に将校になる等の甘い条件に誘われ、47年に予備役に再登録する。彼の予想に反して戦争は数年で勃発し、復学した Duke 大学を卒業し、文学者としての道を歩み始めていた51年1月に彼は再召集される。*Lie Down in Darkness* の原稿は完成間際であった。同年5月から彼は再び South Carolina 州 Camp Lejeune で予備兵として訓練を受けることになる。再召集された予備兵たちの多くは、Styron 同様、再召集を苦痛に感じていた。彼らは第二次大戦後の数年間で家庭を築いたり、仕事のキャリアを積み始めていたのだが、

そうした日常の世界から引き離され、多くの犠牲を払った上で、ほとんどの者には自分が関わる理由が理解できない朝鮮戦争に向けての訓練に従事しなければならなかった。

この二度目の兵役での最大の事件は *The Long March* の設定に使われている、爆発事故とその直後の夜間行軍である。51年6月20日の昼食後、二発の臼砲の砲弾が距離を誤って、野外演習中の分隊に着弾し、死者9名、負傷者20数名の犠牲を出す。Styron の属する連隊は犠牲となった分隊の近くにいたため、即座に救護活動に当たり、彼自身も医者をジープで運ぶ。砲弾は第二次大戦時のもので、古く、不良品だった。Styron の連隊の大佐は連隊を朝鮮半島の状況に適応できるよう鍛え上げると、爆発事件の数時間後に33マイルの夜間長距離行軍を決定し、敢行する。

この事件は海兵隊に対して Styron が感じるアンビヴァレントな感情の縮図となる。26歳の彼は、いまだ、海兵隊の魅力—制服や伝統、人と武器の集団的な力、マッチョな力—に心を動かされていたものの、次第にあらゆる軍隊組織に受け継がれている危険と不条理を文学的に立証する決意を固め始める。

51年8月10日、Styron は朝鮮へ赴かないままに海兵隊を除隊する。除隊は、彼と同じく再召集の予備役である軍医が同情して書いた、白内障による右目の疾患についての診断書によって実現した。以上が、作者と戦争組織との絡まりの概要である。

Ⅱ. The Long March ：第二次大戦表象の影響

The Long March の草稿 "Like Prisoners, Waking" は除隊の翌年52年の初夏から夏にかけてパリで執筆される。51年 に *Lie Down in Darkness* を出版した Styron が二作目の題材に軍隊を選んだ背景には、前年の事故の記憶が鮮明に残っていたこととともに、Norman Mailer の *The Naked and the Dead* (1948)、James Jones の *From Here to Eternity* (1951) の出版

による刺激もあった(West 224)。実戦経験のある二人に比べると、Styronの戦争体験は戦場を経験していない分だけ精彩を欠くが、砲弾爆発と不条理な行軍は小説として書くに値すると、彼は判断したのである。とはいえ、朝鮮戦争時の体験を書くにあたり、第二次大戦を描いた小説から刺激を受けたという事実は示唆的であり、*The Long March* は当時の第二次大戦表象に頻出する、不条理な組織対個人という葛藤を受け継いでいる。

軍隊組織が人間に及ぼす非人間化、機械化を小説として形象化するにあたり、三人の人物が配置される。まず、視点的人物であり、予備役として海兵隊に再召集されたCulver中尉、同じく再召集されたユダヤ人で反抗的なMannix大尉、そして彼らの上官であるTempleton大佐の三人が中心的な人物として設定され、CulverはTempleton大佐に対するMannixの反発と抵抗を目撃する立場に置かれる。Culverは他者の反抗的な態度に魅了されながらも、自らは反抗する勇気を持っていないという点で、*Set This House on Fire* (1960)のPeter Leverett や *Sophie's Choice* (1979)のStingoの先駆となる人物である。

小説は砲弾の爆発による八名の死者の身体が散乱する異様な光景で始まり、軍隊における人間の尊厳の剥奪が象徴的に示される。

> One noon, in the blaze of a cloudless Carolina summer, what was left of eight dead boys lay strewn about the landscape, among the poison ivy and the pine needles and loblolly saplings. It was not so much as if they had departed this life but as if, sprayed from a hose, they were only shreds of bone, gut, and dangling tissue to which it would have been impossible ever to impute the quality of life, far less the capacity to relinquish it. (*Long* 3-4)

ここでは、砲弾で吹き飛んだ人間の姿は、断片化した細胞組織であり、生命を持っていたことも、個人の意志が存在していたことをも想像させない

物体と化した姿で提示されている。無機物と化した人間が散乱する陰惨な光景を小説の冒頭に据えることにより、この小説の主題の一つが軍隊組織における人間の非人間化・物体化であることが示唆されるとともに、この異様な光景は、それを見たCulverとTempleton大佐との間に反応の差異を生じさせ、軍隊組織に適応できない者とできる者との精神構造の違いを前景化する。

再召集された予備役Culverは、殺戮の場面は戦時中ならば当然予想されるものであり、それはやむをえないものと合理化されるか、さもなければ、少なくとも無視される類のものであることを理解していたし、20代初めの頃に参列した第二次大戦中はそのように自己統制できた。だが、戦後の平和の時代に慣れている30歳目前の彼にはもはやそのような自制力はなく、現在の自分が海兵隊の組織にうまく適応できないことを悟る。

予備役のCulverとは異なり、職業軍人であるTempleton大佐は一瞬不安の表情を浮かべるものの、その表情は瞬時に消え、平時と変わらない冷静な態度に戻る。Culverは大佐の表情を観察し、その平静さは軍人が軍隊組織に適応することによって身につける、無意識のうちの演技であると見抜くが、その非人間的な演技は威厳と神秘的な力によって周囲の者を従わせ、周囲の混沌を組織化する力を発揮することを認める。こうした演技力を備えたTempleton大佐は感情や意志を持った個人としてではなく、海兵隊精神の体現者あるいはその操り人形としてCulverに認識される。

威厳をもって周囲を非人間的に組織化していく海兵隊の在り方に対して批判的なのはCulverだけでなく、多くの予備役軍人は同じ感情を共有していたが、なかでもMannixはその批判的な態度を積極的に表明する傾向を示す。Mannixの大佐に対する批判的な態度が明らかになるのは、大佐が夜間行軍の計画を連隊に告げた直後からである。砲弾爆発事件前夜、予備役たちの志気のゆるみを感じたTempleton大佐は、その夜13時間かけて36マイル(約60キロ)の行軍を敢行することを発表する。再召集の予備役に正規の海兵隊員と同等の訓練を課す大佐にMannixは物柔らかに異を唱える

が、大佐は平静に威厳を持って Mannix の意見を退けたため、Mannix は従順を強いられる。

部下に従順を強いる大佐の態度は表面的には暴力的ではない。Templeton 大佐は海兵隊精神の聖職者に喩えられ、彼の感情はすべて「聖職者のような宗教的熱情」から発しており、その情熱の前では反逆者は破滅に落とし込まれるが、けっして暴君ではないために、単純な疑いを抱く者には寛大な態度を示すと、大佐を批判的に観察している Culver でさえ寛大さを認め、さらに、そうした大佐に敬意に近い感情を感じることすらあることに気付いてもいる (30)。大佐のアンビヴァレントな人物像に具現されているように、軍隊は非人間的に、機械的に人を疎外する一方で、権威に付随する威厳という魅力によって人を惹きつけ、自己疎外によって生じる違和感や苦痛を麻痺させてしまい、その結果、人は軍隊機構に仕組まれた罠に気づかないままに進んでとらわれる危険性があることが示される。

その罠の構造を理解する Mannix は大佐の威厳に潜む欺瞞を鋭敏に嗅ぎ取るあまり、大佐に対する彼の態度は批判を越え、やがて反抗の域に達する。Mannix は権力によって不条理な苦役を強いる組織に対して、その苦役を完遂するという逆説によって個人の力を示し、その権力支配を無効化しようと、自虐的に自己を崇高視する。

組織の力に抵抗を続ける Mannix 像は当初の計画にはなかったことを Styron は *The Long March* ノルウェー語版の序文で明かしている。[4] Styron は「人間のアイデンティティという感覚」の欠如した朝鮮戦争における「個性もなく、魂もこもっていない行軍」について書こうとしたのだが、彼の意に反して、個性も意志もある Mannix 像が出現してきた様を次のように説明する (*This* 334)。

> ... against all odds, faces emerge from the faceless aggregate of ciphers, and in the middle of the march I was creating I found Captain Mannix slogging and sweating away, tortured, beaten but

> indomitable. A hero in spite of himself or me, he endures, and in the midst of inhumanity retains all that which makes it worthwhile to be human. I myself cannot be sure, but possibly it is the hopeful implications derived from this mystery — this kind of indefatigable man — which are all an artist can pretend to suggest, however imperfectly, in his struggle to comprehend the agony of our violent, suicidal century. (*This* 335)

Styron は Mannix を戦争機構の非人間性のさなかにあっても人間であり続けるヒーローと位置付け、組織の力に屈さずに根気強く抵抗を続ける個人の姿に希望を見出しているように、取りあえず、この文章は読める。しかし、小説のなかでは Mannix の抵抗に対して礼賛を相対化する視点も導入される。

権力支配に抵抗する Mannix は、自分の信念を成就させるために、自分の率いる中隊全員にも同じ抵抗の姿勢を強要し、最後まで歩かせようとする。つまり、権力支配に抵抗する彼自らが、階級が保障する権力によって部下を支配しようとしていることになり、結果として彼は大佐と同じく、上官の特権的身振りを反復してしまう。Culver は行軍中、組織に対して抱いている軽蔑心を誇示する勇気が自分には欠如していることを痛感し、自分は自由な人間ではなく、組織の一部でしかないと認識する。と同時に彼は、非人間的な圧力に抵抗しようとして、同じ身振りを繰り返す Mannix も実はまた、非人間的な組織に取り込まれているのであり、自由な人間どころか、結局は組織の一部でしかないことに気付く。自由な人間であることに固執する Mannix 像は皮肉にも、自由な人間であることの困難さをも示す人物であるという自家撞着が出現する。[5]

組織に抗う個人という人類普遍の構図は *The Long March* に特異なものではなく、Styron が53年に執筆した "Blankenship" においても反復され、さらに、同時期の戦争表象にも頻出する。たとえば、彼が刺激を受けた Mailer

の *The Naked and the Dead* においても、軍隊、政界、産業界といった組織が個人の倫理観を圧倒するし、Jones の *From Here to Eternity* における Holmes 大尉と Prewitt、Judson 軍曹と Maggio の関係は、権力を自分の人間的属性であるかのごとく不当に行使する、不条理な支配者とその支配に抗う個人という構図になっている。*The Long March* 出版の翌年57年に公開された映画 *The Bridge on the River Kwai* においても、軍隊組織の規律と秩序がむしろ個人の尊厳を守ると信じるイギリス兵 Nicholson 中佐が、不条理な圧制者斉藤中佐から譲歩を引き出すことに成功するが、最後には、味方である連合軍の攻撃によってその信念を打ち砕かれ、軍組織において個人の尊厳が無に等しいことを思い知らされる、という結末になっており、組織がもつ不条理な力が個人を圧倒するという、同じ構図が使われている。

以上は第二次大戦を舞台とした戦争表象であるが、朝鮮戦争時の日本を舞台とする Michener の *Sayonara* でも、東洋人との結婚を禁じる、人種偏見に基づく規則を強制する米空軍という組織とその規則に抵抗する個人という構図が示され、二組の米兵と日本女性とのカップルのうち、一組は心中に追い込まれる。しかし、この心中事件を契機に組織が人種偏見の非を認め、もう一組は容認され、個人の道徳観が組織に勝利するという楽天的な結末がこの小説では示され、これまで検討してきた、組織が個人を圧倒するという図式の転倒が見られる。転倒があるとは言え、この小説も組織対個人の葛藤という、同時期の第二次大戦表象に頻出する構図を踏襲していることに変わりはない。つまり、朝鮮戦争によって新しい世界観がもたらされたわけではなく、朝鮮戦争表象も第二次大戦表象の延長上の枠組みによって語られていることになる。やがて、ヴェトナム戦争の泥沼化にともない、個人を善として直截に提示することが難しい時代を迎え、戦争表象も変容を迫られる。

Ⅲ. "Marriott, the Marine"：ヴェトナム戦争の影響

"Marriott, the Marine"は未完の小説 *The Way of the Warrior* の一部として、71年の *Esquire* 9月号に発表された。Styron の浩瀚な伝記を著した James L. W. West Ⅲによると、"the way of the warrior" という言葉は日本の「武士道」の訳語にほぼ当たり、主君に絶対的な忠誠を誓い、生命を捨てても名誉を重んじる、という侍の生き方の規範を意味し、Styron は、ヴェトナムへの軍事介入が泥沼化した時代にあって、武士道精神に疑問を投げかけるつもりであった (West 398 - 99)。

朝鮮戦争時の51年春に North Carolina 州の Camp Lejeune を舞台として展開される、この "Marriott, the Marine" において、語り手は Styron 同様に再召集された20代半ばの小説家で、処女小説のゲラ刷りを持って訓練地に赴く。訓練所の雰囲気に容易に適応できずに絶望していた語り手が出会う Marriott 中佐は、教養人であるとともに職業軍人であるという相対する二つの側面を併せ持つ人物と設定され、*The Way of the Warrior* において中心的な役割を果たす予定であった。語り手は、一人物のなかで職業軍人であることと、フランス語で Flaubert や Maupassant を読む19世紀フランス文学の愛好者であることが共存しうることに驚き、感銘を受け、海兵隊に対する自分の批判的な見解に再考の余地があると考える。このように、語り手と中佐との最初の出会いでは、職業軍人としての側面よりも文学愛好家としての側面が強調され、語り手の中佐に対する尊敬の念が明示されるが、この二つの側面のバランスは物語の最後で逆転し、語り手は失望を覚える。

このバランスの逆転には、語り手が Darling Jeeter(愛称 Dee) という名の粗暴な少尉と同室になり、その少尉に嫌悪感を覚える、というサブ・プロットが関連する。 Dee の父親 Stud Jeeter は伝説的な海兵隊員であり、Dee の父親に対する尊敬と従順により、この粗野な Dee は伝統的な海兵隊精神の正統な後継者であることが暗示される。Stud の最期の数日を Dee と

ともに同じ部屋で過ごすことを強いられた語り手は、伝統的な海兵隊精神に強い違和感を覚える。Stud との同室と彼の死という顛末を Marriott 中佐に話した語り手は、中佐が Stud の知り合いであるばかりか、Stud は中佐の尊敬の対象であったことを知り、中佐がいかにフランス文学を愛好していようと、結局、彼は本質的には海兵隊精神を身につけた職業軍人に変わりはないことを認識し、文学者であることと職業軍人であることの両立が不可能であると思い知らされる。

Styron が Marriott 中佐のような職業軍人兼文学愛好家という二律背反的な人物を設定したのは、朝鮮半島での紛争の進行にともなって、この人物のなかに政府の方針と自分の任務に対する懐疑を生じさせるためであり、当然こうした枠組みは進行中のヴェトナム戦争を念頭においたものであった、と West は解釈する (399)。政府の方針を疑う職業軍人という、この設定は、組織に抗う個人という、40年代末から50年代にかけて第二次大戦表象で展開された主題を変容させないままに引き継ぐ可能性を孕んではいるものの、[6]軍隊内でも反戦の動きが公然化したヴェトナム戦争の影響をたしかに強く受けている。軍内部での反戦の動きが公然化したのは66年だが、それが小説や映画として形象化されるのは意外なほど遅い。たとえば、海兵隊員が帰還後に反戦運動家へと転身する過程を綴った Ron Kovic の *Born on the Fourth of July* の出版は76年である。それゆえ、70年代初頭にすでにそうした動きをフィクション化しようとした Styron の試みはかなり早いと言えるだろう。

West は指摘していないが、ヴェトナム戦争の影響は Dee の粗暴な人物造型にも見られる。彼が粗暴な印象を与える一因は、彼の言葉使いであるが、語彙の選択のみならず話の内容も暴力的で、海兵隊に入って九ヶ月の Dee は、東洋人と共産主義者に対する差別意識と、多くの敵を殺したいという欲求を次のように繰り返し語る。

"I'll go anywhere the Corps sends me, that's muh duty you see.

but if you want to know the God durn real truth what I really want to do is get over to Korea and stick about six inches of cold steel in as many of those God durned gooks I can get holt of." (202)

"... let me get a knife into both of them Communist sons of bitches, twist an' shove, twist an' shove, that's all, and you'll figure out pretty quick how a man can love cold steel. "

"They're both already dead, " I said.

"They're both dead, all righty-dighty," he said evenly, "then I'll kill some other gook Communist son of a bitch preferably the color of yellow...." (204)

Dee が専門に訓練を受けたのは至近距離での戦闘、特に "knife-fighting" であり、"twist an' shove" という表現は "knife-fighting" の具体的な動作を喚起させるだけでなく、その表現が数度反復されることによって、殺人という行為が機械的に、半ば無意識のうちになされることが暗示され、機械的な殺戮者としての兵士像が浮かび出る。ちなみに "knife-fighting" を含めた至近距離での戦闘自体に残虐な含意があるとは必ずしも言えないことは、たとえば、68年に公開された映画 *The Green Berets* で使われた、Barry Sadler と Robin Moore による歌 "The Ballad of the Green Berets" において、至近距離での戦闘の訓練を受けたグリーン・ベレーがエリートとして讃えられることからも明らかであり、[7]このことからも "Marriott, the Marine" における "knife-fighting" に対する残虐性の付与にはある種の意図があると言える。

米兵によるヴェトナム人の非戦闘員に対する残虐行為が広く米国民に知られるようになったのは、ソンミ事件の存在が知らされた69年のことである。ソンミ事件とは、68年3月16日南ヴェトナム北部クアンガイ省ソンミ村のミライ地区で起きた米陸軍部隊による村民の虐殺事件で、ヴェトナムの

非戦闘員109名が殺害された。事件が発覚し、調査の対象となったのは事件発生後一年以上経てからであり、ヴェトナム勤務を終えた帰還兵が、国務長官などに宛てた投書がその契機となった。村民を殺害した中隊の指揮官William Calley中尉は、事件発覚後、軍法会議にかけられ、終身刑の判決を受けたが、後にNixon大統領によって釈放され、75年には、上官の命令に従っただけ、という弁明が認められて無罪となり、この措置に対して米国民からは強い非難が浴びせられ、ヴェトナム戦争史における米兵の残虐行為と国民の政府に対する不信感を象徴的に表す事件としてソンミ事件は記憶されている。

ソンミ事件に関する報告書類は70年に数冊出版されており、それらを読んだStyronは71年9月12日付 *New York Times Book Review* に "Calley" と題する文章を寄稿している。[8]この事実からすると、*Esquire* の同年9月号に掲載された "Marriott, the Marine" 執筆時には、ソンミ事件に関する報告書をStyronがすでに読んでいた可能性はきわめて高い。

ソンミ事件が発覚した69年はまた、Daniel Langの *Casualties of War* が出版された年でもある。このノンフィクションでは、66年に起きた、ヴェトナム人女性誘拐・レイプ・殺害事件を告発した元米兵とのインタビューをもとに、事件と軍法会議での尋問の展開が明かされる。

68年以前のフィクションおよびノンフィクション—たとえば、David Halberstamの *The Making of Quagmire* (1964) および *One Very Hot Day* (1967)、Robin Mooreの *The Green Berets* (1965) —には米兵による残虐行為は特に見当たらないので、69年がヴェトナムに赴いた米兵に対するイメージの大きな転換点であったと考えられる。ヴェトナムから帰ってきた時に一般市民から本当に唾を吐きかけられたか否かを尋ねたBob Greeneに対し、帰還兵たちが寄せた証言が *Homecoming* (1989) に集められているが、これに当たってみても、帰還後、唾を吐きかけられたという証言は、69年以降が圧倒的多数を占める。

"Marriott, the Marine" のDeeは実戦経験がなく、それゆえ、彼の場合、

残虐行為はまだ行われてはいない。しかし、人種およびイデオロギーに対する強い偏見を持ち、機械的に人を殺害する技術を習得した彼は、状況次第で容易に残虐行為に走る危険性を孕んでいる。自由主義世界の守護者として鍛えられたはずの米兵が、一瞬にして残忍な殺戮者となりうる現実を示唆したという点で、"Marriott, the Marine" はヴェトナム戦争表象史のなかでも先駆的な意味を持つ物語として評価できる。

Ⅳ. 戦争の記憶の再構築

"Calley" と題されたエッセイのなかで、Styron はソンミ事件を引き起こした米国とナチス・ドイツとの類似性を指摘するが、ここで焦点が当てられるのは虐殺の正当化の問題であり、残虐行為と人種偏見との関連は明言されない。それが明言されるのは1977年6月に *New York Review of Books* に寄稿された "A Farewell to Arms" においてである。[9]このエッセイにおいて、Styron は "[r]acism was as important, ideologically, to the conduct of the Pacific war as racism was to the war in Vietnam" と語り (*This* 230)、ヴェトナム戦争時に露見したアジア人に対する人種偏見を通して第二次大戦の記憶を再構築する。第二次大戦中の日本人もヴェトナム戦争時のヴェトナム人もともに猿と見なされ、そうした人種偏見が前提となり、たとえばナパーム弾での攻撃が容易になることを Styron は指摘する。このエッセイにおける人種偏見は特にアジア人に対する偏見に限られているわけではなく、より普遍化されてはいるものの、ヴェトナム戦争を通じて彼のなかでアジア人に対する偏見が顕在化されたことは間違いなかろう。

次に Styron が海兵隊の物語を発表するのは1985年だが、この物語 "Love Day" ではアジア人に対する偏見は "Marriott, the Marine" のようにサブ・プロットとしてではなく、中心的な主題として現れる。[10] "Love Day" は第二次大戦末期に時代が設定され、沖縄上陸を目指す艦艇が計画の変更によ

りサイパンに戻るという、いわば枠組みの物語が、語り手の少年時の回想を挟む形式になっており、それゆえ、前二作と同様に、この短編でも実戦は描かれない。しかし、前二作との大きな相違は、語り手が海兵隊精神の批判者としてではなく、むしろ海兵隊精神に疑問を抱かず、人種偏見も強い、粗野な兵士として造形されている点である。海兵隊員同士の会話によって前景化される人種偏見は過剰にステレオ・タイプ化されているがため、むしろパロディの様相を帯びており、それゆえ、この過剰なステレオ・タイプ化が、前二作の語り手に代わって、海兵隊精神に対する批判者として機能しているとも言える。

しかし、批判される対象は海兵隊にとどまらない。この短編では人種偏見を形成する土壌は、海兵隊という、ある種、特殊な組織に限定されてはいない。語り手が11歳の時に影響を受けた *The Saturday Evening Post* 誌掲載の "The Curse of the Rising Sun" という、日本軍が米国に上陸した後の混乱と恐怖を扇情的に描いた物語が提示されることによって、人種偏見を形成する土壌はむしろ当時の米国社会一般へと拡大されているため、海兵隊における極端な人種偏見を支える背景としての米国社会が浮かび上がる仕組みとなっている。さらに、 *The Long March* と "Marriott, the Marine" において語り手は良識ある人物として存在しているのに対し、"Love Day" において語り手自身が人種偏見に満ちた粗暴な青年と造型されていることからも、ある共同体における良識が他の共同体に対して暴力となりうる世界において、良識ある人物がもはや存在し得ないことを表しているとも考えられる。[11]

このように、朝鮮戦争時の海兵隊を題材とした *The Long March* と "Marriott, the Marine"、加えて第二次大戦時の海兵隊を題材とした "Love Day" を執筆順に並べると、軍隊の非人間的なシステムに絡めとられる個人という中心的な主題に、米兵の残虐性やその残虐性を支えるアジア人への人種偏見といったヴェトナム戦争によってもたらされた洞察が加えられ、物語が変容していく過程が現れる。

さらに、朝鮮戦争に対する登場人物の反応についても、*The Long March* と比較すると "Marriott, the Marine" においてはヴェトナム戦争の影響が窺われる。朝鮮戦争に対する登場人物の反応は共に再召集への嫌悪感として現れる。*The Long March* において再召集への嫌悪感は、家庭や仕事という平穏な幸福からの断絶という個人的なレヴェルにおいて主として語られる。それに対し、"Marriott, the Marine" において再召集への嫌悪感は日常生活からの断絶のみならず、軍隊での営みに対する嫌悪、戦争自体に対する反感、そして死の予感が詳述される。戦争に対する反感は、第二次大戦勝利が約束したはずの平和の到来が絶え間ない戦争状態へとすり替わったことへの幻滅感、第二次大戦中の南方の島々とは異なり朝鮮半島の寒冷地での戦いに対する適応不安や、国連軍最高司令官解任直後の MacArthur を熱狂的に迎えるニューヨーク市民の好戦的な態度に対する違和感として示され、朝鮮戦争独自の色合いが多少加えられるものの、主調をなすのはすでに市民の間に芽生えていた漠然とした反戦の感覚であり (101,196)、朝鮮戦争自体に対する洞察は明瞭には示されない。

しかし、この物語において特徴的なのは再召集者を犠牲者として繰り返し強調する点である。語り手は再召集者たちの連帯感、"such a sense of a community of victims" が第二次大戦では見られなかったものと分析し (103)、"it seemed to [the narrator] that all of [the reserves] were both exemplars and victims of some uncontrollable aggression, a hungry will for bloodshed creeping not only throughout America but the world" と、再召集者たちを正当性のない攻撃に加担せざるを得ない犠牲者と位置づける (104)。正当性の疑わしい戦争に加担せざるを得ない兵士の苦悩はヴェトナム戦争表象に頻出することは言うまでもない。

Styron の朝鮮戦争に対する批判は、小説よりもむしろ、1962年頃に書かれたと思われるノルウェー語版 *The Long March* の序文に現れている。[12] 彼は "remote and strange Korea" における戦争への違和感を次のように表明する (*This* 334)。

> World War II was dreadful enough, but at least the issues involved were amenable to reasonable definition. To be suddenly plunged again into war, into a war, furthermore, where the issues were fuzzy and ambiguous, if not fraudulent, a war that could possibly be "won," a senseless conflict so unpopular that even the most sanguinary politician or war lover shrank from inciting people to a patriotic zeal, a war without slogans or ballads or heroes — to have to endure this kind of war seemed, to most of us involved in it at the time, more than we could bear. (*This* 334)

この文章には朝鮮戦争の大義名分を疑う戦争終了後からの視点が含まれている。朝鮮戦争は最終的には南北朝鮮双方に多大な人的・物的被害を与えただけでなく、30万人以上の兵力を投入した米軍は3万人以上もの死者を出したにもかかわらず、朝鮮半島情勢はほぼ開戦前の状態に復帰しただけに終わり、さらに南北間に強い不信感をもたらす結果となった。Truman 政権が朝鮮戦争の目的を38度線の回復に限定せず、北進による南北の武力統一や国際共産主義に対する勝利を掲げたために、38度線の回復だけでは米国民は納得せず、米国にとっては、南北戦争後の南部を除いては、初めて勝利感なき戦いとなった。

しかし、開戦二ヵ月後に当たる50年8月の米国世論の多数は Truman 政権の朝鮮政策を支持し、さらに Truman の声明同様、朝鮮戦争を局地的紛争としてでなく東西対決を基盤とした第三次世界大戦の一環としてとらえる姿勢を示している (*Public* 170, *Gallup* 933)。つまり、開戦当初は米国民の多数は、戦争目的が曖昧だとする Styron の見解を共有していたわけではなかった。ところが、彼が再召集の通知を受けた51年1月は、前年11月末からの中国義勇軍の予想外の参戦が米国民に衝撃を与え、戦線縮小を求める声が多数を占め始めた時期に当たり (*Gallup* 960-61)、Styron の朝鮮戦争

に対する懐疑はこうした世論の影響を受けていた可能性もある。

一方で、"Marriott, the Marine" において朝鮮戦争自体に対する見解が明確に示されず、さらに *The Long March* においてはほとんど無視されているのは、彼にとって、問題はあくまでも自分が再召集されたことにあり、朝鮮戦争がいかなる戦争であったかが主眼ではないことを表しているとも考えられる。"Love Day" において第二次大戦の脅威がファシズムの席捲ではなく、日本軍による米国上陸として表現されていることを考慮すると、"remote and strange Korea" における戦争の曖昧さとは、直接米国を攻撃する恐れのない相手を、イデオロギーの対立のみを理由に、敵とみなすことに対する違和感なのかもしれない。

*　　*　　*

Styron の小説において、朝鮮戦争自体はけっして関心の中心には置かれず、より普遍化された、組織と個人の対立という、40，50年代の第二次大戦表象に見られる主題を提供する題材として用いられている。その意味では、彼にとって題材は「戦争」あるいは「軍隊」であれば良いのであり、それが朝鮮戦争である必然性には欠けると言えなくもない。とはいえ、ヴェトナム戦争によって顕在化した問題によって自らの軍隊経験を再構成し、米兵の犠牲者としての側面のみならず、残虐な加害者としての側面をも浮き彫りにし、さらにその残虐性の根を米国社会に存在する人種偏見にあると考察した点で、戦争の解釈に新たな視点を導入していることは確かである。80年代以降、朝鮮戦争の帰還兵たちがヴェトナム戦争のオーラル・ヒストリーに刺激され、自らの記憶を再構築することが可能になったように、Styron もヴェトナム戦争をいわば触媒として朝鮮戦争の記憶を、さらに第二次大戦の記憶をも再構築しており、今後の朝鮮戦争表象あるいは第二次大戦表象に興味深い比較の視点を提供している。

註

1. O'Nan は *The Vietnam Reader* の第六章 "The Oral History Boom" に次の五点を収めている。 Al Santoli, *Everything We Had* (1981), Mark Baker, *Nam* (1981), Wallace Terry, *Bloods* (1984), Keith Walker, *A Piece of My Heart* (1985), Bernard Edelman ed., *Dear America: Letters Home from Vietnam* (1985).
2. PTSD という概念は1980年、アメリカ精神医学会の「DSM- Ⅲ精神疾患の診断・統計マニュアル」に記載されることで広く認知される。兵士の神経障害については、第一次大戦中に、砲弾が至近距離で落ちた後のショック症状がシェル・ショックと命名され、これが PTSD の原型であると考えられる。その後、ショック症状がより広範な状況で観察されたため、兵士の戦闘後遺症は戦争神経症という名前で広く知られるようになり、さらに、ヴェトナム戦争の帰還兵に見られる戦争神経症の研究から PTSD という概念が成立する。
3. Styron の訓練期間については、資料によって違いがあるが、本論の伝記的事実は James L. W. West Ⅲによる伝記 *William Styron: A Life* を参照した。
4. この序文は *This Quiet Dust and Other Writings* に収録。
5. Mannix については組織に抗う個人であり、ヒーローであるという解釈と、彼も自由意志を失い、組織の一部として機能していることを指摘する解釈に分かれる。前者の解釈が示される論は Ruderman 88－92、斎藤103－106、後者の解釈が示される論として Malin 182－89、衣川32－33。Pearl は Mannix の執着は非合理と論ずるが、非合理な固執を通して、逆説的に、Mannix が人間的で英雄的な存在へと達すると解釈する (85－86)。
6. Styron の他の小説を見ても、軍隊という組織に抗う個人という図式は、直接、米軍を題材としていない *Sophie's Choice* においても、海軍から安く払い下げられたペンキのピンク色に支配された部屋に、さまざまな補足的な色彩を加えることによって個性を発揮し、趣味の良い部屋へと変化させた Sophie が、「不屈のピンク色に対する一種の勝利」をおさめている、というエピソードとして反復され、引き継がれる。(66)
7. "The Ballad of the Green Berets" では、至近距離での戦闘の訓練を受けた ("[t]rained to combat, hand to hand") グリーン・ベレーが、"America's best" と賞賛される (O'Nan, 285)。この歌の受容について *The Vietnam Experience* を参照すると、批評家からは単純すぎると相手にされなかったが、米国のサイレント・マジョリティには愛国的な聖歌として受け取られていた (28)。
8. この文章は *This Quiet Dust and Other Writings* に収録。
9. この文章は77年に出版された Philip Caputo によるノン・フィクション *A Rumor of War* を取り上げている。*A Rumor of War* ではヴェトナム人に対する侮蔑の念を抱く著者が、やがてヴェトコン容疑者の殺害を容認するに至り、最終的には軍法会議にかけられる経緯が明かされる。
10. "Love Day" の初出は *Esquire.* August (1985): 94－105. その後、*A Tidewater Morning* の冒頭に置かれる。
11. "Love Day" において語り手の日本人に対する偏見に異を唱える母親が登場するが、

彼女の理想主義は、軍事産業に加担せざるを得ない夫の苦悩との対比によって、非現実的で感傷的なものと相対化され、その限界を露呈する。さらに、この短編を *A Tidewater Morning* という短編連作集の一部として見た場合、最後の短編 "A Tidewater Morning" において、母親はアフリカ系アメリカ人に対する根強い偏見を拭い去ることができない人物として登場するため、良識家で理想主義の実践者という人物像は無効化される。

12. 執筆時期が1962年ごろと推測されるのは、この序文の執筆時期が "ten years after the writing" と示されていること (*This* 333)、さらに62年にノルウェー語を含む14ヶ国語の翻訳の計画が進んでいたことが West による伝記に記されていることによる (365)。

Works Cited

American Institute of Public Opinion. *The Gallup Poll.* 2, (1949-58). New York: Random, 1972.

American Psychiatric Association, *Diagnostic and Statistical Manual of Psychiatric Disorders,* 3 (DSM- Ⅲ) Washington, D.C.: American Psychiatric Association, 1980.

Batson, Denzil. *We Called It War!* Leawood: Leathers, 1999.

The Bridge on the River Kwai. Dir. David Lean. Columbia Pictures, 1957.

Caputo, Philip. *A Rumor of War.* 1977. New York: Owl, 1996.

Dannenmaier, William D. *We Were Innocents.* Chicago: Illinois UP, 1999.

Ehrhart, W.D. and Philip K. Jason. *Retrieving Bones.* New Brunswick: Rutgers UP, 1999.

Federman, Raymond. *Take It or Leave It.* New York: Fiction Collective, 1976.

The Green Berets. Dir. John Wayne and Ray Kellogg. Warner Bros, 1968.

Greene, Bob. *Homecoming.* New York: Putnam, 1989.

Halberstam, David. *The Making of Quagmire.* 1964. New York: McGraw, 1987.

- - - . *One Very Hot Day.* Boston: Houghton, 1967.

Hellmann, John. *American Myth and the Legacy of Vietnam.* New York: Columbia UP, 1986.

Hillstrom, Kevin and Laurie Collier Hillstrom. *The Vietnam Experience: A Concise Encyclopedia of American Literature, Songs, and Films.* Westport: Greenwood, 1998.

Jones, James. *From Here to Eternity.* 1951. New York: Delta, 1998.

Knox, Donald. *The Korean War.* 1985. San Diego: Harvest, 1987.

Kovic, Ron. *Born on the Fourth of July.* 1976. New York: Pocket, 1977.

Lang, Daniel. *Casualties of War.* New York: McGraw, 1969.

Mailer, Norman. *The Naked and the Dead.* 1948. New York: Owl, 1998.

Malin, Irving. "The Symbolic March." Eds. Robert K. Morris and Irving Malin. *The Achievement of William Styron.* Athens: Georgia UP, 1981. 179-90.

*M*A*S*H.* Dir. Robert Altman. Aspen Productions and Twentieth Century Fox Film, 1970.

Michener, James A. *The Bridges at Toko-ri.* 1953. New York: Ballantine, 1982.

- - - . *Sayonara.* 1954. New York: Ballantine, 1983.

Moore, Robin. *The Green Berets.* 1965. Concord: Moore Hill, 2000.

Newman, John. *Vietnam War Literature.* Metuchen, N.J.: Scarecrow, 1988.

O'Nan, Stewart ed. *The Vietnam Reader.* New York: Anchor, 1998.

Organ of the American Association for Public Opinion Research. *Public Opinion Quarterly.* Spring 1951. Princeton: Princeton UP, 1951.

Pearce, Richard. "William Styron." Ed. Daniel W. Ross. *The Critical Response to William Styron.* Westport: Greenwood, 1995.

Potok, Chaim. *I Am the Clay.* 1992. New York: Ballantine, 1994.

Ruderman, Judith. "Styron's Farewell to Arms: Writing on the Military." Ed. Daniel W. Ross. *The Critical Response to William Styron.* Westport: Greenwood, 1995.

Styron, William. "Blankenship." *Papers on Language & Literature* 23 (1987):430-48.

- - - . *In the Clap Shack.* 1973. *The Long March, and, In the Clap Shack.* New York: Vintage International, 1993.

- - - . *Lie Down in Darkness.* 1951. New York: Vintage International, 1992.

- - - . *The Long March.* 1956. *The Long March, and, In the Clap Shack.* New York: Vintage International, 1993.

- - - . "Marriott, the Marine." *Esquire* September (1971): 101-04, 196-210.

- - - . *This Quiet Dust and Other Writings.* 1982. New York: Vintage International, 1993.

- - - . *Set This House on Fire.* 1960. New York: Vintage International, 1993.

- - - . *Sophie's Choice.* 1979. New York: Vintage International, 1992.

- - - . *A Tidewater Morning.* 1993. New York: Vintage International, 1994.

West, James L. W., Ⅲ. *William Styron: A Life.* New York: Random, 1998.

生井英考 『負けた戦争の記憶』三省堂、2000年

カミングス、ブルース『朝鮮戦争の起源』鄭敬謨他訳、全２巻、1989－91年

衣川清子「ウィリアム・スタイロン『ロング・マーチ』の一考察」『中央英米文学』26号、(1992年)26－34

斎藤忠志「『強行軍』一人間性の回復を求めて」『中央英米文学』20号、(1986年)99－106

中村紘一『アメリカ南部文学の愉しみ：ウィリアム・スタイロン』臨川書店、1995年

ハーマン、ジュディス・L『心的外傷と回復』中井久夫訳、みすず書房、増補版、1999年

ハルバースタム、デイヴィッド『ザ・フィフティーズ』金子宣子訳、全２巻、新潮社、

1997年
マコーマック、ギャヴァン『侵略の舞台裏』鄭敬謨他訳、シアレヒム社、1990年
油井大三郎『日米戦争観の相剋』岩波書店、1995年。
リッジウェイ、マシュウ・B『朝鮮戦争』熊谷正巳他訳、恒文社、新装版、1994年
和田春樹『朝鮮戦争』岩波書店、1995年

The Korean War in Styron's Fictions

Izumi MATOBA

The Korean War had been neglected in American literature, until the oral history of the Vietnam War boomed in the 80s and many of the veterans published their memory of the war. Encouraged by this oral history boom, Korean War veterans have published their own oral histories for the last two decades. William Styron's two fictions, *The Long March* (1956) and "Marriott, the Marine"(1971), are considered as earlier works concerned with the Korean War in American literature. Though Styron served in the Marines twice, first during the Second World War and second during the Korean War, he spent most of his time in camps and was not sent to the battlefields. Based on his own military experience, the settings of the two fictions were both military camps in North Carolina, not battlefields in Korea. Although the actual battlefields in Korea were not represented in the fictions, it is possible to see his viewpoint on the Korean War in them.

In *The Long March* antagonism between individuals and the inhumane military system is represented through a captain's rebellion to a colonel. The theme, the inhumane military system suppressing the individuals, frequently appears in war stories and films of the time, such as Norman Mailer's *The Naked and the Dead* (1948), James Jones's *From Here to Eternity* (1951), and David Lean's *The Bridge on the River Kwai* (1957). As Styron, stimulated by the success of *The Naked and the Dead* and *From Here to Eternity,* decided to fictionalize his own

camp experience as *The Long March,* it is considered that he was strongly influenced by the conflicts frequently seen in the Second World War stories in the 40 s and early 50s.

"Marriott, the Marine" is a part of his uncompleted novel *The Way of the Warrior* in which Styron planned to demonstrate that a regular officer, who embodies the esprit of corps of the Marines, has become suspicious of the justification of his service, realizing the inhumanity of military system. Although the conflicts between the individuals and the military system, repeatedly seen in the Second World War stories, succeeded in the novel, influences of the Vietnam War were also scattered in it. For example, the officer's suspicion of his service and the government, which Styron planned to clarify, suggests the anti-war movement even in the military, which was public knowledge in 1966.

Besides, in "Marriott, the Marine" brutality in a certain U.S. soldier is portrayed: prejudice against communists and Asian people, and desire for murder. In 1971, when "Marriott, the Marine" was published, he also published an essay, "Calley," a kind of review on several books about First Lieutenant William Calley and the massacre in My Lai which, revealed in 1969, shocked the people in the U.S.A., and helped many of them regard U.S. soldiers as baby killers and rapists. Styron portrays the same kind of brutality in soldiers who served in the Korean War.

Prejudice against communists and Asian people is amplified in "Love Day," a Second World War story published in 1985. The story suggests that the prejudice for ideology and races, not only in military but also in U.S. society, contributes to the brutality and inhumanity in the soldiers. Comparing *The Long March* with "Marriott, the

Marine" and "Love Day," it is clear that Styron has reconstructed his memory of military service in the Second World War and in the Korean War with insight gained from the Vietnam War.